

「考えさせる授業」をめざして ～「アクティブラーニング」で主題にせまる～

阿賀野市立分田小学校 石塚恵美

1 はじめに

当校の研修テーマは「考えさせる授業への改革」である。昨年までは、書くこと・話すことについて「型（スキル）」を活用して言語活動の充実を図ってきた。成果も見られるが、児童の姿は受け身な態度である。そこで今年度は、これらのスキルをさらに生かし、また、教師自身も児童の学習意欲や主体性の向上を土台とした「考えさせる授業」へ意識改革をして、授業に取り組んだ。

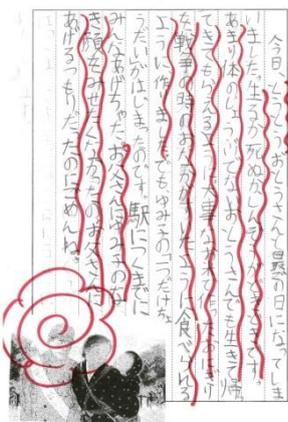
「考えさせる授業」は、一人一人の児童がうんと考え、仲間と考えを検討し合い、自分たちで答えを導き出していく。そして自分たちで解決した学びに誇りと自信をもち、「また解きたい！」と次の学習意欲をもって授業を終えていく。なにより、自分たちで見つけた学びは、いつまでも記憶に残る学びとなる。

以下の実践は、国語科における児童の主体的・協働的な学び（アクティブラーニング）の提案授業である。

2 実践の実際（4年国語「一つの花」）

（1）実践の内容

① 単元を貫く言語活動「お母さん日記」



本単元を貫く言語活動を『お母さん日記を付けよう』と設定する。こうすることで、教材に対して叙述をなぞるだけの「受け身なかかわり」から、自分なりの価値観をもって『発信』するという「主体的なかかわり」へ学習を変化させられると考えた。

また、この激しい戦争の時代を生き抜いた家族の愛情物語を母親の立場になって日記を書くことで、児童が「子を想う親の愛情を意識しながら読み取れる」と考え、学習の振り返りの活動として取り組ませた。このように取り組ませることで、児童が、どのように思考を働かせて読み深めたか自覚でき、また教師も児童の読み取りを把握することができる利点もあった。

② 学習課題の工夫＝「考えさせる」ための発問

T「一つだけちょうだい」と言えば、何でももらえたゆみ子。
そんなゆみ子に、十年後の今、一つだけあげるよ。と言ったら、
ゆみ子は何を欲しいというだろうか。

本時は、最後の学習場面、主題にせまるための発問である。これまでの読み取りを基にしながら、分かりそうで分からない（適度な抵抗感のある）課題を設定し、「知りたい！」という児童の主体的な思考活動につなげた。

③ 進んで課題解決に取り組ませるための見通し

ア) 行間を読むための「学習掲示物」



本教材の私なりの主題の捉えは、「戦争が奪うことのできない、子を想う親の愛情」である。授業では、教材の中で繰り返し使われる「一つだけ」という重要語句の意味を場面ごとに押さえたり、両親の行動や会話文の叙述に着目しながら、行間に隠れている両親のゆみ子に対する愛情を考えさせ、児童に親の目線でこの物語の世界観を味わわせた。



本時は「ゆみ子が欲しい物」と問うことで、これまでのゆみ子の生活や両親とのかかわりに目を向けさせ、その過程で両親の深い愛情（主題）に気づかせたいとねらったものである。したがって、児童にとって、学習の跡である掲示物は、課題解決のための大きな手がかりとなった。

イ) 教材を見つめる視点となる『お母さん日記』

授業の最初に、学習の最後は『お母さん日記』を書くことを確認した。こうすることで児童は母親の立場になって教材を見つめようとする意識を高めた。

④ 児童相互の学び合いの時間の充実



自力解決では、考えに迷いがある様子。すると、児童から「友達と相談したい。」と申し出があった。児童は、グループを作り、これまでの学びを語り合った。そして、「毎年コスモスが咲く頃になると、母を通して父の想いや愛情を知り、可能なら父にもう一度会いたい。と願っているのではないかと」と、答えを絞り込んだ。



⑤ 学習の振り返り

本時のねらいは、これまでの読み取りを基に、行間にある登場人物の想いを想像しながら主題に迫ることである。児童は、ゆみ子が欲しい物を考える過程で、両親の深い愛情や父親の想いを母親が受け継いでいることを話し合い、確認し、自分の言葉で「お母さん日記」にまとめた。



3 おわりに

「考えさせる」ためには、発問は重要である。「アクティブ」に学ばせるには、なおさらである。本授業において導入時に伝えるべき発問の大事なキーワードを失念してしまった。わずかな言葉だったが、そのために児童の考えにブレが生じてしまった。その後、発問に波線の部分を加え、授業をやり直した。わずかな違いではあるが、児童はその後、ねらいに迫る発言を自分たちで積み重ね、それらを「お母さん日記」に記して授業は終わった。「何を考えさせるのか」「そのために、どう問うべきか」教師こそブレてはいけない。発問は授業の要である。